



2007 J.LEAGUE AWARDS 最優秀選手賞はポンテ(浦和)

フェアプレー賞 高円宮杯は10年ぶりに該当チーム。G大阪が受賞

「2007 J リーグアウォーズ」が12月17日、横浜アリーナにおいて開催された。Jリーグのシーズンを締めくくる恒例の授賞式。日本サッカー協会の川淵三郎キャプテンをはじめとするサッカー関係者、オフィシャルスポンサーやメディアの関係者、そしてJ1リーグ戦を戦った各チームのファン・サポーターが見守る中、各賞が次々と発表された。会場は華やかな雰囲気包まれ、厳しいシーズンを戦い抜いて荣誉を手にした晴れがましい顔が並んだ。



©J.LEAGUE PHOTOS

会場はおなじみの横浜アリーナ。華やかな装飾に気分も浮き立つ



©J.LEAGUE PHOTOS

Jリーグ杯(優勝銀皿)を携えた柳沢を先頭に年間優勝の鹿島が入場

Jリーグの鬼武健二チェアマンのあいさつ後、Jリーグベストピッチ賞から始まった2007 Jリーグアウォーズの各賞発表は、最優秀選手賞の発表でクライマックスを迎えた。今年の受賞者は浦和レッズのMFポンテ。浦和は今季、惜しくもJ1リーグ戦の優勝を逃したが、ポンテは33試合に出場して7得点を挙げただけでなく、味方選手のゴールチャンスも数多くおぜん立てし、攻撃の中心選手として大活躍を見せた。AFCチャンピオンズリーグ(ACL)2007においても、貴重なゴールをマークするなど、初優勝に大きく貢献した。

浦和の選手が最優秀選手賞を受賞したのは、03年のFWエメルソン、そして昨年のDF

田中マルクス闘莉王に続き3人目。年間優勝チーム以外の選手を受賞は、過去15年の歴史で7人目となった。

残念ながらポンテは負傷の治療のために母国のブラジルへ帰国しており、直接の表彰を受けることはできなかった。しかし、受賞決定直後にJリーグからの連絡を受け、「このような名誉ある賞をいただいたことは、皆さまから認めていただいたということで、とてもうれしく思います。浦和レッズのクラブスタッフ、選手、そしてぼくが心から愛する多くのファン・サポーターが応援してくれたことにも、とても感謝しています」と喜びのコメントを寄せ、チームメートのMF鈴木啓太がこれを代読した。



©J.LEAGUE PHOTOS

©J.LEAGUE PHOTOS

【写真上】大型映像装置に映し出されたポンテ。ステージ上の自動車は副賞の「Touareg V6」(提供社 フォルクスワーゲン グループ ジャパン株式会社)、左手のボードは同じく副賞の「カリブ海クルーズベアの旅」(提供社 株式会社スカイパーフェクト・コミュニケーションズ)。【写真下】ポンテに代わって副賞の「ゴールデンボールトロフィー」(提供社 株式会社デサント)を持つ浦和のチームメートと、浦和の藤口光紀代表取締役社長(右から2人目)、プレゼンターの岡島秀樹さん(右端、野球のアメリカMLB ボストンレッドソックス)

最優秀選手賞に先立って発表されたベストイレブンには、このポンテを含め浦和勢が最多の5名、選ばれた。また、昨年は初受賞が8名だったが、今年はGK都築龍太(浦和)、DF岩政大樹(鹿島アントラーズ)、ポンテ、FWのジュニーニョ(川崎フロンターレ)、バレー(ガンバ大阪)の5名。優勝した鹿島から唯一、ベストイレブンに選出された岩政は「その点が複雑」と言いながらも、「みんなの頑張りのおかげ」とチームメートへの感謝を忘れなかった。

ジュニーニョは、得点王とのダブル受賞。J1でプレーするようになってから「なりたかった」という得点王獲得のあいさつを「本当にありがとう」と日本語で締めくくった。新



ベストイレブンに選ばれた選手たち。左から、阿部勇樹、岩政大樹（手前）、バレー、鈴木啓太、田中マルクス闘莉王（手前）、ジュニーニョ、中村憲剛、山口智（手前）、都築龍太、遠藤保仁。※ポンテは負傷治療のため欠席



今季のJ1で22ゴールを挙げ、念願の得点王となったジュニーニョ



「これからも素晴らしい賞を取り続けたい」と新人王の菅野



審判歴30年という岡田氏（左）と、31歳の相楽氏（右）



日本サッカー協会の川淵キャプテン（右）から、G大阪の山口にフェアプレー賞 高円宮杯が授与された

「2007 Jリーグアウォーズ」受賞者一覧

最優秀選手賞	ポンテ（浦和）
(GK)	都築 龍太（浦和）
(DF)	岩政 大樹（鹿島）／田中 マルクス闘莉王（浦和）／山口 智（G大阪）
ベストイレブン	
(MF)	阿部 勇樹（浦和）／鈴木 啓太（浦和）／ポンテ（浦和）／中村 憲剛（川崎F）／遠藤 保仁（G大阪）
(FW)	ジュニーニョ（川崎F）／バレー（G大阪）
得点王	ジュニーニョ（川崎F）
新人王	菅野 孝憲（横浜FC）
フェアプレー賞 高円宮杯	ガンバ大阪
フェアプレー個人賞	坂田 大輔（横浜FM）／伊藤 輝悦（清水）／佐藤 寿人（広島）
最優秀監督賞	オズワルド オリヴェイラ（鹿島）
優秀主審賞	岡田 正義
優秀副審賞	相楽 亨
Jリーグベストピッチ賞	東北電力ビッグスワンスタジアム
功労選手賞	本田 泰人（鹿島）、アマラオ（湘南）、城 彰二（横浜FC）※チーム名はJリーグにおける最終所属
特別賞	浦和レッズ

人王に輝いたのは横浜FCのGK菅野孝憲（23歳）。初めてJ1でプレーしたが、素晴らしい反射神経、安定したゴールキーピングを披露して奮戦した。

フェアプレー賞 高円宮杯の受賞チームが出たのは、1997年のヴィッセル神戸以来、10年ぶりのこと。この重要な賞を手にしたのはG大阪。日本サッカー協会名誉総裁の高円宮妃久子殿下からは「ガンバ大阪の皆さま、フェアプレー賞 高円宮杯の受賞、おめでとうございます。フェアプレーこそ、ゲームの品格であり、サポーターに美しい夢と感動を与えます」と、同協会の川淵三郎キャプテンを通

じてその栄誉をたたえるお言葉を賜った。

フェアプレー個人賞には、FW坂田大輔（横浜F・マリノス）、MF伊東輝悦（清水エスパルス）、FW佐藤寿人（サンフレッチェ広島）の3名が選ばれた。

最優秀監督賞は、就任1年目で鹿島を優勝に導いたオズワルドオリヴェイラ監督。「チャンピオンになっただけでもうれしいのに、こんなに多くのプレゼントをいただけるとは」と、感激を新たにしていた。

優秀主審賞、優秀副審賞はそれぞれ、岡田正義氏、相楽亨氏が受賞。岡田氏は「選手、サポーターの皆さまに満足してもらえるよう

なレフェリングを目指して」、相楽氏は「自分の質を高め、Jリーグ全体の質を高めていく協力ができれば」と、新シーズンへの豊満を述べた。

ACL2007に優勝を飾り、TOYOTAプレゼンツFIFAクラブワールドカップ ジャパン 2007ではアジアのチームとしては史上最高となる3位という好成績を収めた浦和には、特別賞が贈られた。

年間優勝チーム表彰では、川淵キャプテンより鹿島に日本サッカー協会長杯（キャプテン杯）が授与され、J2リーグ戦に優勝を飾ったコンサドーレ札幌の紹介も行われた。

大会 浦和が歴史的な勝利、そして世界の3位に

TOYOTAプレゼンツ FIFAクラブワールドカップ ジャパン 2007でアジアの代表として大健闘



欧州、南米の代表に続き、アジアの代表として3位となった浦和。日本サッカー界、Jリーグにとっても大きな意味を持つ快挙だ

AFCチャンピオンズリーグ2007に優勝を飾り、アジア代表としてTOYOTAプレゼンツFIFAクラブワールドカップ ジャパン 2007 (12月7～16日、日本開催)に出場した浦和レッズが、3位の好成績を収めた。

浦和は12月10日、豊田スタジアムで行われた準々決勝にあたる初戦で、AFCチャンピオンズリーグ2007決勝で破っているセパハン(イラン)と再び対戦。FWの永井雄一郎、ワシ

ントンの得点、さらに相手のオウンゴールにより3-1と快勝し、日本のクラブチームとして世界のひのき舞台上で初となる歴史的な1勝を挙げた。

準決勝ではUEFAチャンピオンズリーグ2006-2007優勝の欧州代表、ACミラン(イタリア)と顔を合わせた。世界的なスター選手をそろえる欧州王者に挑み、攻守に健闘したが、相手の高い個人技によって1点を失い惜

敗。だが、ホルガー オジェック監督は「日本の、アジアの代表として力を出すことができた」と試合内容に胸を張った。

そして3位決定戦では、CAFチャンピオンズリーグ2007優勝のアフリカ代表、エトワール・サヘル(チュニジア)と対戦し、90分を終えて2-2の接戦。大会規定によって延長戦は実施されず、PK方式を4-2と制した。浦和の3位は、2005年の大会のアルイテハド(サウジアラビア)の4位を上回り、アジア勢の最高の成績となった。

今大会において浦和が収めた成果は、日本サッカー界にとって、Jリーグにとって、大きな財産となるだろう。Jリーグや天皇杯全日本サッカー選手権大会の活躍を通してアジア、世界への道が開けることをはっきりと示し、わが国の全選手、ファン・サポーターに夢と希望を与えた。AFCチャンピオンズリーグ2008には浦和(前回優勝のため準々決勝から出場)に加え、鹿島アントラーズ、ガンバ大阪が参加するが、彼らにとっても新たな戦いへの刺激となったことは間違いない。数多くのチームが国際舞台で得た貴重な経験を、日本サッカー界、Jリーグに還元し、レベルアップ、活性化に役立ててくれることを期待したい。

チーム	1回戦 (開幕戦)	準々決勝	準決勝	3位決定戦	決勝
ボカ・ジュニアーズ 南米代表(CONMEBOL)			1		2
エトワール・サヘル アフリカ代表(CAF)		1	0	2	
パチューカ 北中米カリブ海代表(CONCACAF)		0			
セパハン アジア代表(AFC) ※準優勝	3	1			
ワイトケレ・ユナイテッド オセアニア代表(OFC)	1		0	2 (PK 4-2)	4
浦和レッズ アジア代表(AFC)		3			
ACミラン 欧州代表(UEFA)			1		



準決勝のACミラン戦。カカ(右)の突破に対処する阿部、相馬、ネネ(左から)

熱狂の
スタジアム

2007 Jリーグ公式試合の年間入場者数が最多記録を更新

浦和もJクラブとしては初めて、年間の公式試合入場者が100万人を突破

12月8日に行われたJ1・J2入れ替え戦第2戦によって、今季のJリーグの公式試合の日程が終了した。そして、公式試合の年間入場者数は、859万510人を記録。これまでの最多だった2005年の853万9178人を上回る最多記録となった。J1リーグ戦の1試合平均入場者数も1万9081人と、

1994年の1万9598人に次ぐ史上2位だった。

また、浦和レッズは今季の公式試合における年間入場者数が108万6668人を記録。Jクラブとしては初めて、100万人の万台を突破した。さらに昨季の89万6949人も上回る、Jリーグ最多記録となった。

【Jリーグ公式試合年間入場者数ランキング】

年間入場者数合計	年度	試合	J1の1試合平均
1 8,590,510	2007	683	19,081
2 8,539,178	2005	635	18,765
3 8,363,963	2006	686	18,292
4 7,405,048	2004	565	18,965
5 6,797,035	2003	555	17,351

育成

2007年 第2回Jリーグ・アカデミー コーチングワークショップを実施

アルゼンチンからウーゴ トカリ氏を講師に招き、本場の育成年代の指導に触れる



© J.LEAGUE PHOTOS

アルゼンチンにおける育成年代の指導について講義を行うトカリ氏。基礎技術の習得、心を込めたコーチングの重要性などを説いた

Jクラブにおいて育成に携わる指導者などを対象とした「2007年 第2回Jリーグ・アカデミー コーチングワークショップ」が12月3日、4日の2日間、JFAハウスで実施された。今回の講師は、アルゼンチンから招いたウーゴ トカリ氏(59歳)。今年6~7月のFIFA U-20ワールドカップ カナダ2007においては、U-20アルゼンチン代表の監督として優勝を成し遂げた人物だ。

トカリ氏は59名の参加者に対し、アルゼンチンにおける育成の実情や問題点を語り、自らの経験や考え方に照らして、育成のあるべき

姿についての持論を述べた。また、参加者も活発に質問を行い、世界的指導者からの理論、知識の吸収に努めた。

トカリ氏が11~13歳の低年齢層において重視するのが、基礎技術の習得。「基礎技術を徹底的に学ばせないと、上の年齢になったときに選手個人が大きなリスクを負うことになる」と強調した。そして、14~20歳でも、当初は技術を磨くことに力点を置き、上の年齢に近づくにつれて戦術練習もトップチームに近い内容になるという。

アルゼンチンの育成組織は11歳の12軍から



© J.LEAGUE PHOTOS

ワークショップ終了後の記念撮影。Jクラブの育成担当者たちは、世界的な指導者から大いに刺激を受けた

19/20歳の4軍まで、生年ごとのチームに分かれる。トカリ氏はそれぞれのカテゴリーにおいて「1シーズンに30~50試合ができるようなリーグ戦の必要性」を訴える。これは試合で明らかになった問題点を修正し、次の試合に生かすというサイクルを、長期的な視野に立って実践するためだ。

さらに、ワークショップのほかにも、横浜F・マリノス、FC東京、柏レイソルの協力を得て、トレーニングや試合を視察し、Jユースサハラカップ2007 第15回Jリーグユース選手権大会 決勝トーナメントの試合にも足を運ぶなど、精力的にJクラブの育成の現場に接した。そして、「選手たちは技術的に素晴らしい。コーチの力が大きいのだろう。マニュアルだけに頼るのではなく、心を込めて指導してほしい」とアドバイスを送った。

キャリア

2007/2008 Jリーグ合同トライアウト〔第1回目〕を開催

緊張感のあるプレーにスタンドから熱視線

JリーグとJリーグ選手協会の主催による2007/2008 Jリーグ合同トライアウト〔第1回目〕が12月11日、大阪長居スタジアムで行われた。次年度に向けてクラブとの契約を更新できなかった選手たちが、新たな活躍の場を求め、スカウトなどチーム関係者の前でプレーし、アピールを行う合同トライアウトも6年目を迎えた。

今回は81名の選手が参加。GKテストのほか、25分間の試合が5回行われ、「生活がかかっている分、本当に緊張感のあるプレー」(サガン鳥栖のMF山口貴之)が、熱い視線を注ぐ監督・コーチ、スカウトらの前で演じられた。Jリーグ合同トライアウト〔第2回目〕は2008年1月15日、フクダ電子アリーナで開催される予定。



© J.LEAGUE PHOTOS

ピッチ上の選手の動きを真剣に追う、スカウトなどチーム関係者

ロッソ熊本、FC岐阜がJリーグ入会

Jリーグは、12月3日に行われた臨時理事会で、2008年からのJ2入会を申請していたロッソ熊本およびFC岐阜について審議し、両クラブの入会を承認した。ロッソ熊本およびFC岐阜の概要については、下記の通り。

ロッソ熊本	
法人名	株式会社 アスリートクラブ熊本 代表取締役 前田 浩文 設立：2004年12月21日
所在地	熊本県熊本市水道町5-21 コスギ不動産水道町ビル3F
所属リーグ	2006年～：JFL (2005年～：九州リーグ1部)
ホームタウン	熊本市
ホームスタジアム	熊本県民総合運動公園陸上競技場(KKウイング)

FC岐阜	
法人名	株式会社 岐阜フットボールクラブ 代表取締役 今西 和男 設立：2006年8月28日
所在地	岐阜県岐阜市学園町3-42 未来会館6F
所属リーグ	2007年～：JFL (2006年～：東海リーグ1部)
ホームタウン	岐阜市
ホームスタジアム	岐阜メモリアルセンター長良川競技場

2007 Jリーグ チェアマン総括

(社)日本プロサッカーリーグ チェアマン 鬼武 健二

イレブンミリオンのスタート

2010年までに年間総入場者数を1100万人にするJリーグ・クラブ共通の中期目標を設定した。今年はその1年目となったが、最終的に、過去最高の年間8,590,510人(前年比103%)を達成した。これはクラブスタッフはもとより、選手、チームスタッフ全員がその目的を理解し、積極的に取り組んだ成果と感謝したい。目標設定の1年目ということで、各クラブの現状把握、個々の課題も明確になった。今後は、さらに自治体やスポンサー、そして、多くのファン・サポーターなど、Jリーグに関わるすべての方々の協力が必要であり、より一層の理解を求めている。

リーグ戦・リーグカップ戦について

J1リーグ戦の優勝争いは、昨年、一昨年に続き、最終節までもつれこむ盛り上がりを見せた。鹿島アントラーズは、終盤の9連勝と最後まで諦めない戦いで見事優勝を成し遂げた。Jリーグ史上初のクラブ10冠という偉業を高く評価したい。浦和レッズは、終盤ペースダウンし、惜しくも優勝を逃したが、ACL(AFCチャンピオンズリーグ)とリーグ戦の両タイトルを狙った意気込み、シーズンを通して堂々と戦い続けた姿勢に敬意を表したい。両者を中心とした優勝争いは、リーグ戦の醍醐味を日本中のサッカーファンに伝えてくれたことと思う。

ヤマザキナビスコカップでは、ガンバ大阪が攻守のバランスのとれたゲーム運びでトーナメントを制し、クラブ史上初のリーグカップ戦タイトルを獲得、関西の盛り上げに貢献した。また、今シーズンも、ガンバ大阪のフェアプレーの徹底は見事であった。

今年は、リーグ全体で多くの有望な若手選手が台頭し、アジア男子サッカー2008 予選でも素晴らしい活躍で、見事北京オリンピック2008の出場権を獲得した。

このことは各クラブにとって、大きな財産となったことと思う。

J2リーグ戦は、上位と下位の実力差が拮抗してきた結果、最後まで熾烈を極める昇格争いが行われた。各クラブが着実に力をつけ、試合レベルが向上した。

ACLの制覇

今年特筆すべきは、なんといっても浦和レッズのAFCチャンピオンズリーグ2007の制覇であろう。15年目を迎えたJリーグであるが、今後のさらなるレベルアップのためには、アジアを牽引し、世界と対等にわたりあえる実力を多くのクラブが備えていくことが必要である。今年は、日本サッカー協会とJリーグが連動して、ACLサポートプロジェクトも立ち上げた。出場クラブの努力に敬意を表するとともに、サッカー界全体が結束してアジア制覇という大きな目標を成し遂げたことに感謝したい。

アカデミー活動の充実

子供たちの育成環境を整えていくためには、年間を通したコンスタントな試合数の確保、国際経験を積めるような機会創出が重要である。前者については、今年U-13リーグをスタートさせ、試合機会の少ない年代を中心にホーム&アウェイ方式を中心としたリーグ戦を実施した。来年はU-14リーグもスタートする予定であり、地域クラブとも一緒に、より多くの子供たちの試合数確保を目指していく。また、後者については、従来のU-15 Jリーグ選抜ブラジル遠征に加え、今年はドイツ遠征も実施し、さらに、中国・韓国とはユース世代のキャンプでそれぞれが交流するなど、育成年代の国際交流・国際経験の積み上げも充実した。

素晴らしい選手の育成のためには、技術面だけではなく、ベースとなる人間教育も指導者に求められる重要な役割である。今年は、選手一貫教育プロジェクト



© J.LEAGUE PHOTOS

を立ち上げ、子供たちの問題解決能力や考える力を引き出せるような指導者養成にも積極的に取り組んだ。

ホームタウン活動の充実

各クラブが地域性を生かして様々なホームタウン活動に取り組んでくれた。

今年は、厚生労働省と連携し「Jリーグ介護予防事業」がスタートした。今後の高齢化社会を見据え、地域の高齢者の方々が、健康にスポーツを楽しめるような環境づくりへの取り組みは、将来に向けて意義ある第一歩となったことと思う。さらに、各クラブで、各種の社会貢献活動やスポーツ振興など、「Jリーグ百年構想」の具現化に向けて、地域と連動した活動が目に見える形で充実した1年となった。

こうした活動の広がりにより、全国のJリーグ入りを目指すクラブや地域の理想のクラブ像がより明確に発信されたことと思う。

冒頭に記したイレブンミリオンは、単なる入場者数の目標値ではなく、クラブと地域が一体となったすべての活動が充実して初めて実現するものと考えている。イレブンミリオンという共通目標を掲げたことで、各クラブが、地域と連携したより魅力的なクラブづくりに改めて取り組み始めたことに感謝したい。今後も、地域、クラブ、チーム、選手が、それぞれの個性を発揮できるよう、さらなる努力を積み上げていきたい。



「Jリーグニュース」は100%再生紙を使用しています。